

植	物	
防	疫	
講	座	

虫害編-8

コバネイナゴの発生生態と防除

元 宮城県古川農業試験場 城 所

たかし
隆

はじめに

我が国の水田には、6種1亜種のイナゴ属が生息するが（福原，1982），最も普通に見られるイナゴ属が，コバネイナゴ *Oxya yezoensis*（バッタ目：バッタ科）（図-1，図-2）である。ハネナガイナゴが比較的多い時代や地域もあったが，1990年前後に行われた水田や休耕田における調査によると，確認されたのは西南暖地の一部だけで密度も低かった（ANDO and YAMASHIRO, 1993；安藤，1993）。現在多発が報告されるのはコバネイナゴであることと，発生生態についての研究が進んだのも本種であることから，ここではコバネイナゴについて解説する。

イナゴはイネを加害するという意味では害虫であるが，多くの地域で佃煮の材料として利用されてきた。イナゴ採りは秋の風物詩でもあり，俳句の季語でもある。このように古くから親しまれてきたイナゴであるが，1950年代になって多くの地域で減少した。東北地方の日本海側や新潟県では，絶滅状態とも表現される期間が20年以上続いたが，1985年ころから一転して多発するに至った。例として山形県における発生面積の推移を示すが（図-3），1992年の発生面積は同県の水田面積の58%にも達している。こうした発生の極端な増減は，戦後の化学合成農薬の普及，その後の選択性農薬への転換および繁殖地となる休耕田の増加を原因とするのが通説だが，この点は後に再論したい。

本文に入るに先立ち，写真や資料の提供をいただいた弘前大学名誉教授の安藤喜一氏とバイエルクロップサイエンス株式会社の田守 秋氏に厚く感謝する。

I 形 態

体の大きさには大きな変異がある。例えば福原（1982）によると，成虫の体長は雄で16～33 mm，雌で18～40 mm，前翅長は雄が9～26 mm，雌が17～32 mm もの違いがあり，「これが分類学的混迷の原因」とされた。

Ecology and Management of Rice Grasshopper, *Oxya yezoensis*.
By Takashi KIDOKORO

（キーワード：コバネイナゴ，生活史，発生予察，管理法）



図-1 コバネイナゴの成虫



図-2 コバネイナゴの若齢幼虫（田守氏提供）

翅の長短ではハネナガイナゴとの区別はできないし，小型でエゾイナゴと呼ばれたことのある北海道や東北部の集団は，コバネイナゴの低温型とされた。こうした体サイズの大きな変異の理由については，生活史のところで述べる。

体色は黄色がかった緑色であるが，成虫の背側は褐色（図-1）のほか，緑色，紅色等がある（図-7）。秋田県のある地点における雌成虫の調査では，その比率は褐色型が約70%，緑色型が約30%，紅色型が0～3%であった（昆野，1998）。いずれも複眼の後ろから前胸部にかけて黒褐色の筋模様がある。